古

代

住吉村、御影村、遠目村（東明）の地名が見える。『摂津名所地図』より（神戸市立中央図書館所蔵）

後世の書物によると、このあたりに大倭氏・雀部氏・凡河内氏などの豪族の名が見える。前記の古墳も、そのような豪族の手になるものだろう。大和の朝廷は、服属した各地の豪族の長に姓とよぶ称号を与え、氏族を単位として間接的に支配圏を拡大していった。しかし七世紀になると、この間接的な氏姓制度を克服して、中国にならって天皇中心の集権国家を作ろうとする動きが活発になり、それは六四五年以降の大化改新と律令の制定というかたちで実現されてゆく。律令制度によると今日の夙川から生田川に至る六甲南麓の地方は摂津国菟原郡とされ、東灘の地域は、葦屋郷（本庄や本山の東部と芦屋市の一帯）・佐才郷（魚崎一帯）・住吉郷（本山の西部と住吉）・覚美郷（御影地方）などの諸郷に分けられた。このときの菟原郡の郡役所は地名によると、御影の郡家から住吉の室之内あたりに設けられたと考えられていた。最近の考古学的調査の成果もそれを裏付けている。つまり、郡家大蔵・同中町・同城ノ前一帯で奈良時代から平安・鎌倉時代にかけての建物址などが多数発見された。平安時代の記録によると、この菟原郡に戸数四三七戸、人口一五六九五人とある。

律令国家は公地公民の原則に立って班田の収受を行った。その頃の土地制度が一町四角の碁盤目状に地割を施した条里制である。一ノ坪（小路と御影）・二ノ坪（小路）・三ノ坪（北畑）・三王坪（深江）・泉ケ坪（同）・西ノ坪（横屋）・篠ノ坪（御影）・八ノ坪（青木と横屋）・八条垣（岡本）・十ケ坪（御影）など、区内には条里制の名ごりと思われる地名も多く残っている。また、この時つけられた碁盤目状の道路や水路のなごりもいくつか残っており、深江近辺で東西に流れる高橋川もその一つである。

だが奈良時代には公地公民制も動揺し始め、荘園が出現する。すでに天平十九年（七四七）に菟原郡内に三十一町余の法隆寺領の水田があった。平安時代には住吉川流域に北野神社領の山路荘の名も記録に残っている。

保久良神社

本山町北畑字ザクガ原

金鳥山の南中腹につき出た、標高約百八十mの台地上にある。境内に石庖丁・石鏃などの石器や弥生式土器を多く出土し、灘区伯母野山遺跡や芦屋市会下山遺跡などとともに弥生時代の高地性集落の遺跡といわれる。

神社は『延喜式』に載る古社だが、本殿周辺に神鳴岩や三交岩など多くの巨石組みがあって、更に古く古代人の残した磐座（神がこの世に来臨される時の依代となった巨石）と考えられ、古い祭祀遺跡である。境内南西すみの石組みの下から銅戈がみつかっている。

鎌倉時代の建長二年（一二五〇）改築の記録があり、荘園制発達の中で本庄九か村の総鎮守として信仰された。祇園信仰の影響を受けて、古い祭神椎根津彦命に加えて、須佐之男命（午頭天王）が祭られたため、江戸時代には天王さんと通称された。

一月二十日には大俵祭と称して、ダイヒョウ餅を供える風習があり、五月四日・五日の例祭には氏子地（北畑・田辺・小路・中野）から今もだんじりが出されてにぎわう。古くは本庄九か村の総鎮守であったが、明治五年（一八七二）に県の指示で、森・深江・青木の諸村が分離し、さらに明治二十二年（一八八九）の町

保久良神社

村制の施行時に東の三条、津知が芦屋や打出に合流して精道村を構成してしだいに離れ、結局今日では北畑・田辺・小路・中野の旧四か村が残り、これら四台のだんじりが出る。四日夕刻に各地区から出されただんじりは、お旅所である鷺の森に宮入りし、一夜をあかす。静かな住宅地帯は、この時ばかりはだんじりばやしや伊勢音頭で急に活気がみなぎる。五日の本宮では山上から神輿が練りおりる。

神　鳴　岩

保久良神社のだんじり

保久良山の楊梅（やまもも）

保久良神社境内地

山上の保久良神社境内は、もち・杉などが繋り、寒竹と笹のやぶが深い。昼間でもうす暗い森である。中でも樹齢百年以上という楊梅はみごとで、市の保護樹林に指定されている。果実の季節には、赤い実を取りに多くの人が登ってくる。

この所在地のザクガ原という地名は、またザフクガ原とも記されており、もと雑木ガ原ではないかと思われる。

神社境内の西に、昭和五十年（一九七五）には保久良梅林が開かれた。

やまももの林

魚崎の地名

阪神電車を魚崎駅でおりると、すぐ西側には住吉川が流れている。魚崎は、この川が六甲山地を削って運んだ土砂を、川口に堆積して作った砂州で、江戸時代には、五百崎とも書かれている。

伝説によると、三韓への出兵のために神功皇后が諸国から軍船を集めさせたところ、この浜に五百隻の船が結集した。そこから五百崎の名が出たという。別の伝説では、応神天皇の代に伊豆の国から枯野という名のすばらしい船が献上された。しかし長い年月のうちにこの船も朽ちて使えなくなってしまった。そこでその船体を燃料として浜辺で塩を焼き、諸国に命じて代りの船を差出させ、代償としてこの塩を与えたところ、この浜辺に五百隻の船が集まったので、五百崎と呼ぶのだ、と言う。

のちに、不漁つづきのある年に、土地の漁民は領主に願い出て、豊漁を祈って地名を魚崎と改めた、とも伝えている。

近世菟原郡の海岸地帯を灘と呼んでいたが、ここ魚崎を中心に、東は今津あたりまでを中灘、西は生田川尻までを大灘と称していた。

魚崎浜の海水浴風景
（昭和初期／神戸アーカイブ写真館提供）

魚崎八幡宮神社

魚崎南町三丁目十九
市バス魚崎八幡宮前

魚崎八幡宮神社は、旧魚崎村の氏神である。応神天皇を祭神とし、五百八幡神社ともよばれる。

本殿背後にある朽ちた大きな松の切り株は、神依りの松と称され、伝説では三韓から帰国の際ここの海辺に上陸した神功皇后が、船を舫った浜辺の松のなごりだと伝えられている。しかしその名や、境内における位置から考えると、古代信仰で神が祭りの時にこの世に降り立たれる時の依代として神聖視された巨木ではないかと思われる。境内にある酒造業者仲間から寄進された石燈篭や酒樽業者からの手水石など、灘の酒づくりをしのばせる石造品も多い。

平成七年（一九九五）の震災で、本殿は全壊、九年に仮本殿と鳥居が再建された。

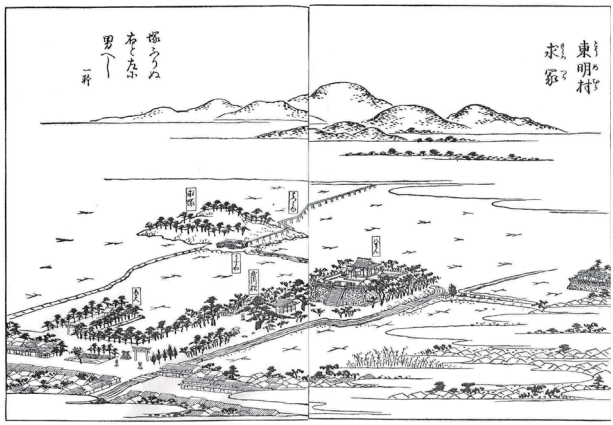
酒樽業者寄贈の手水石

東明

御影塚町一帯は、昔の東明村だ。中世には徳井村（灘区）を中心とする徳井荘に属しており、徳井あたりからみて遠くに見えるため、遠目の浜と呼んだという。また魚崎で軍船を建造した時、神功皇后の大臣武内宿禰がここから遠目に見ながら造船の指図をしたため遠目といい、それが今の東明の語源だとか、朝鮮への出兵からの帰途軍船がここまで来た時、夜が明けて東の

魚崎八幡宮神社

空が白みはじめたので、この名がついたなどと、神功皇后伝説も伝わっている。あるいは、処女塚がこの地にあるため、オトメが訛ってトーメとなったと説く人もある。



東明の処女塚・水車場など（『摂津名所図会』より）

東明八幡神社の武内の松

御影塚町二丁目九
阪神石屋川駅

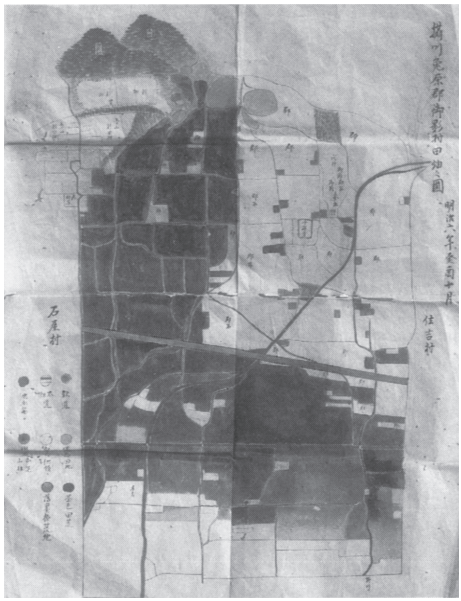
処女塚の東南、国道四十三号線に面して旧東明村（御影塚町）の氏神八幡神社がある。祭神は、応神天皇。境内東方に武内の松と称する古松の株がある。社伝では、神功皇后がこの浜から九州熊襲の討伐に出発された時、重臣武内宿禰が砂浜に松の小枝をさして、今度の戦さに勝てば繁茂せよ、と祈った。はたして戦勝のちその松は根をおろし、葉を繁らせたといい、その松を武内の松とよぶようになったと伝えている。

武内松古跡

御影の地名

御影は東灘区の西端にあり、住吉や岡本とともに住宅地として知られている。江戸時代には、酒造業や石材の産出でさかえ、浜辺はその積出し港としてにぎわった。御影石の切り出しはすたれてしまったが、酒造企業は今でも海岸ちかくに数多い。

伝説によると、三韓からの帰途、このあたりに上陸された神功皇后が、そこに湧く美しい泉（今の沢の井）に、御姿をうつされたことから御影の名が出たといったり、聖徳太子の母后が難波（なにわ）で西方にむかって仏を拝まれたところ、この地の山ごしに阿弥陀仏の御姿が出現したので、この地名が出た、などと伝えている。また本住吉神社の神影が現われるところからこの背後の山に御影山の名がついたのが、地名のおこりだともいう。



御影の古地図（中勝寺蔵）

史実の上から考えると、平安時代の『和名抄』はこのあたりにカガミ（覚美）郷の地名を記しており、この地の綱敷天神の古いご神体として地金（じがね）の銅塊が祭られていたことなどを考えあわすと、古代には付近に銅細工にかかわる技術者集団の鏡作部（かがつくべ）がいたのではないかと推測される。そこから鏡（覚美）の郷名がつき、やがて鏡に映す姿つまり御影の地名が出たのではないかと考えられる。

沢の井

阪神御影駅西・五十m
阪神電車高架下

今も清水が湧いているが、神功皇后が化粧のために姿を映され、そのために御影の地名がでたと伝説する井戸である。

南北朝時代には、この泉の水で酒を醸して後醍醐天皇に献上したところ、たいそうよろこ（嘉）ばれて、その酒を納められた。その時からあたりの酒造の一族は、嘉納の姓をなのりはじめたと伝えている。

井戸は大きな石づくりで円形、わきに水神の祠がある。

昭和六十年（一九八五）、阪神御影駅北側広場の整備に際して、広場の一画にこの沢の井にちなむモニュメントが地元の住民や企業によって建てられた。広津雲仙筆「沢の井の地」の銘と、田辺眞人撰の説明文を刻んだ一・二m立方の御影石のモニュメントで、上部からは新たに掘られた井戸の水がくみ上げられて、石面をうるおしている。

「沢の井の地」モニュメント

また、井戸の南側には、昭和初期に御影市場（現「旨水館」）の防火用水地として整備されてたが、阪神大震災により回りの擁壁などが崩れたため、地元や企業によって改修工事が行われ、さらに南側には御影石が敷き詰められた広場が誕生した。

沢の井

弓弦羽神社

御影郡家二丁目九　阪急御影駅

旧郡家村・御影村の氏神で、伊弉冊尊、速玉男命、事解之男命を祭神とする。

弓弦羽神社

社伝によると、三韓より帰国の神功皇后が、忍熊王がむほんを企てたのを知って、この地に軍を置き戦勝を祈って、その背山に熊野権現を勧請したのが縁起とされる。皇后が祈願のため弓矢甲冑を山中に埋めたことから、その社は、弓弦羽権現宮とよばれたと伝えるが、明治の初めに現社名に改められた。

榎・樟などの繁る境内の弓弦羽の森は、昭和四十九年（一九七四）に市の保護樹林に指定された。

弓弦羽神社と香雪美術館の間の静かな道

六甲山の地名

古代、今日の大阪あたりが日本の中心であった頃、そこの人達は、海のかなたに眺められる土地ー今の西宮・芦屋・神戸の山河を、海のムコウの里・ムコウの山・ムコウの川と呼んでいた。

その後、漢字が伝来し、土地の呼び名にも漢字が当てられるようになり、「ムコ」には務古・武庫の字が当てられた。少し後には、六甲（ムコ）の字も使われ、それがいつしか「ロッコウ」と読み誤まられた。武庫川・六甲山・古の務古の泊など、こうして生まれた地名である。しかし、時が移って、地名のこのような意味は忘れられ、文字の持つ感覚から地名を説明する伝説がかもし出されていく。江戸時代になると、六甲山というのは、昔、神功皇后が三韓への出兵からの帰途、反乱をくわだてた麝阪王ら首謀者六人の首を甲をつけたまま切ってこの山に埋めたので、この名があると、ほとんどの書物は解説するようになる。

天保年間の「摂津国名所旧跡細見大絵図」

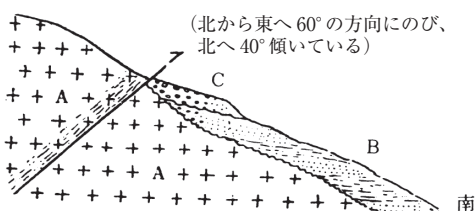
渦ケ森衝上断層

渦森台二丁目
市バス渦森台三丁目

六甲山地は、第四紀（約二百万年前－現在）の地殻変動で形成された。その六甲変動とよばれる地殻変動は、西南日本の地形形成上、重要な要因となったものであるが、六甲山地の北西と南東、つまり裏・表にはこの変動によって生じた多くの断層がある。

表六甲の主断層のひとつである五助橋衝上断層の副断層が、住吉町渦ケ森一八七三の一の地で、顕著な露出をみせていた。六甲山花崗岩が、第四紀下部の大阪層群を不整合におおう段丘礫層の上に、衝き上げたことをよく示しており、昭和四十六年（一九七一）、県の天然記念物に指定された。しかし、今では断層面そのものも、木や草におおわれてしまって、観察不可能な状態である。

渦ケ森衝上断層の碑



A．六甲花崗岩
B．約 100 万年前にできた砂や粘土の地層（大阪層群）
C．約 20 万年前にできた砂や石まじりの地層（高位段丘層）
造成工事のとき、あらわれていた土地の断面

（『教育こうべ』より）

断層露出地

郡家（ぐんげ）と室之内（むろのうち）

阪急御影駅の東南方に郡家という名の村があった。そのすぐ東、ＪＲ住吉駅の北には最近まで室之内という地名が残っていた。

また、その付近には、堂ノ本・古寺・宮守堂・新堂・寺前などの字名があり、すぐ、南方に古社の本住吉神社があって、古い建物の所在を示している。（55ページ参照）

郡家というのは、律令の国・郡・里という地方制の中の郡衙（郡役所）の所在した土地を示すことばである。またこの西隣の八田部郡では室内（むろのうち）（長田区）に、さらに播磨国加古郡では古大内（ふるおおうち）（室之内の訛とされる）に郡衙があった。

そのようなことから、このあたりが、律令制の成立後に摂津国の西部に置かれた菟原郡（夙川から生田川に至る六甲南麓地方）の郡衙が置かれた地だと考えられる。なお、最近の発掘調査によると、郡家城ノ前、同大蔵では奈良時代を中心とした六世紀から八世紀の須恵器が多数出土し、掘形の一辺が一ｍ近い大きな掘立柱をもつ三間×四間の建物が発見され、郡家中町からは緑釉陶器片が出土しており、郡衙に関係のあった遺跡だったと考えられている。

郡家遺跡第21次調査発掘現場（神戸市埋蔵文化財センター提供）

本住吉神社

住吉宮町七丁目一
JR住吉駅

表筒男命・中筒男命・底筒男命・神功皇后を祭神とする。三韓からの帰途、神功皇后が難波近くまで来ると船がまわって進まなくなってしまった。そこで務古の水門にもどって占うと、表筒男・中筒男・底筒男という三柱の海の神があらわれ、「大津の渟名倉の長峡にその神をまつれば航海を守護しよう」と告げた。こうして創祀された神社だと社伝にいう。大阪の住吉大社は、そののち仁徳天皇の頃にここから移されたものであるため、こちらを本住吉とよぶのだと伝えられる。また当社は郡名から江戸時代には菟原住吉・茨住吉とも称されていた。

神社のすぐ北方に室之内や郡家などの古地名のあることから、古代には菟原郡の郡衙と関係をもつ社ではないかと推察される。中世には、住吉川流域の山路荘の総氏神として信仰されていた。元弘・建武などの戦乱で荒廃したが、室町時代には次第に復旧し、元和以来の神領寄進状が数通ある。大正時代には縣社とされたが戦災にあい焼失。現在の社殿は阪神・淡路大震災

本住吉神社

後復興されたものである。

境内にあるさざれ石の上部のくぼみには、ふだんは雨水もたまらないが、毎年土用になると、ふしぎに水がわき出してたまる、と伝説されている。また、住吉村道路元標も境内にある。

毎年五月五日の例祭には、呉田のお旅所まで鳳輦の渡御があり、だんじりの勇壮な地曳きも行われてきた。古くは山路荘全体の鎮守として信仰されていたため、住吉・魚崎・横屋・野寄・岡本・田中などの村々をも氏子地とし、それらから全盛期には、十基以上のだんじりが宮入りしていた。今は旧住吉村内の八地区の八基と野寄・横屋・西青木・岡本のだんじりが参加している。

住吉神社のダンジリ

長峡の松

呉田にある住吉神社の御旅所にあった古松。この地が昔、大津渟名倉之長峡とよばれたところで、神功皇后が住吉の神をまつるために船をつけられた所だと伝える。

神功皇后船つなぎの松ともよばれ、住吉神社のお旅所がここにあることから考えると、本住吉神社の神さまの依り代としての神木だったのであろう。

森の稲荷神社

森北町四丁目十七
市バス森北町二丁目

社伝によると、元正天皇の霊亀元年（七一五）卯月卯日の夜、深江の中に暗夜を照らす妙な光が現れた。人々が不思議に思って、海岸に集まっていると、波のまにまにその光りは岸に近づき、砂浜に打上げられた。村人が驚いていると、中から「われは稲荷の神霊、この山手の森かげに鎮座したい」と告げられた。神託どおりにお祀りすると、近在は豊かになり平安な日々が続いた。人々は、神さまの漂着を祝って毎年卯月卯日の日に祭りを行ない、卯の葉祭りと称してきた。

江戸時代には、保久良神社とともに近郊の本庄九か村の総氏神としてあつく信仰されたが、明治五年（一八七二）に氏子は県の命令で分裂、以後、森・深江・青木の三地区が氏子地として残り、他は保久良神社の氏子となった。

森稲荷神社

踊り松

深江本町四丁目二
阪神深江駅

深江の西端、現在の神戸大学海事科学部養正館（深江本町四丁目二）のあたりに、踊り松とよばれる老い松の大木があった。

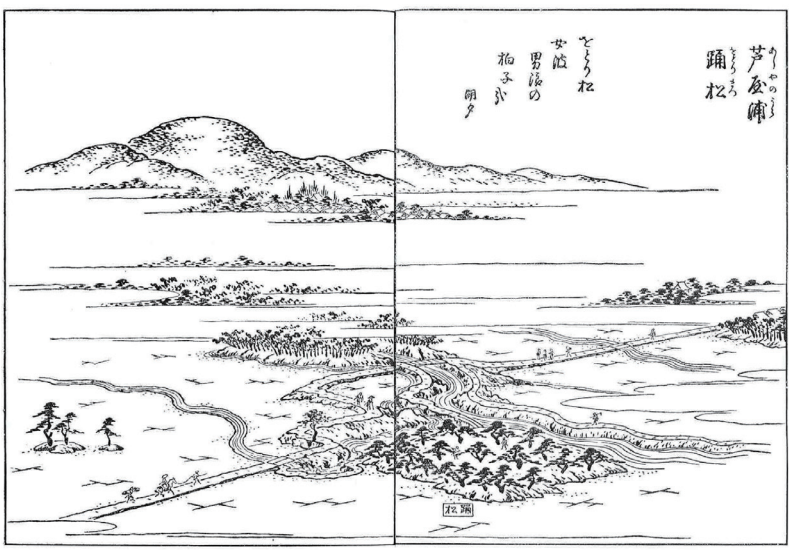
霊亀元年（七一五）、神輿に乗った森の稲荷神社の神が沖あいから上陸された所だという、古い波打ちぎわの松であった。この時、人々がよろこんでおどりまわって神さまを迎えたから、この松を踊り松というのだという。その後、大洪水があって森稲荷が流失した時、ようやくここに神さまが流れついたとも伝える。

この洪水の時は麦の刈入れ直後だったので、麦をついていた森の村人は、杵を持ったまま神を迎えにここまで来て、喜んで松のまわりを踊りまわって神社へ帰って行った。この時から森稲荷の祭日にはこの松のまわりで杵をかついで、氏子が神迎えの踊りをする風習ができ、松を踊り松と呼ぶようになったと『摂津名所図会』は記している。

松の枝ぶりが踊るような姿であるために起った名であろう。その地は長く大正時代まで森の稲荷神社の御旅所とされていた。しかし市街地化の中で、松も砂浜も姿を消し、踊松町の名も、町名改定によってなくなってしまった。

なお、養正館の敷地の北東角に、神戸商船大学（現神戸大学海事科学部）開学三十周年の記念に、深江財産区の手で、この踊り松の記念碑が建てられた。

踊り松の碑



踊り松、浜街道を行く人。松の東は高橋川（『摂津名所図会』より）

御影（みかげ）の松

御影本町六丁目三
阪神御影駅

美しい白砂に映える浜辺の松林は、古来名勝として、東の雀の松原（魚崎）とともに文人に好まれ、多くの紀行文に描かれ、軍記物の中ではその松林に陣が張られた記録がよくでてくる。

御影本町六丁目の西方寺の境内に、

〝世にあらば又帰りこむ津の国の　御影の松よ面（おも）かはりすな
藤原基俊

よみ置し松のことはのちりうせず　ふたたび千代のかげぞ栄む
権中納言藤原正房〟

の二首を刻んだ御影の松の歌碑がある。その名松は明治十七年（一八八四）頃に枯れ、その木片も明治二十五年（一八九二）の大火で焼失。今は若い松が碑のわきに植えられている。

また、阪急御影駅北改札口前の広場に御影の松のモニュメント・解説板がある。

「御影の松」古跡（西方寺内）

綱敷天満神社

御影町一丁目二十二

太宰府へ左遷される途中で菅原道真が、この地に休息した時、土地の山背という者が、石の上に綱を敷いて席を設けてもてなしたという。のちに菅公が太宰府神社にまつられてから、その子孫の菅原善輝が、この地に休息した道真をまつり、故事にちなんで今の社名をつけたと伝えている。同様の伝えが、須磨の綱敷天神にも伝わってくる。

しかし、古くここに別雷神（わけいかづち）をまつる天神社があったことから考えると、道具の御霊を信仰する風習が天神信仰としてひろまる中で、この気象の神を祭る天神社でも菅原道真が祭神とされることになったのだろう。

ところで、この神社の祭神の一つに、蒼稲魂（うかのみたま）の神がある。四天王寺建立のため石材を探していた聖徳太子が、立派な石の出土したことを祝ってこの地から出た鉱石に、その神の姿を刻んだ霊像というのが、社宝として所蔵されている。約二十五㎝の銅塊であり、『和名抄』にみえるカガミ郷や、今の御影の地名とともに、付近に古代の技術者集団、鏡作部（かがみつくり）がいた痕跡ではない

綱敷天満神社

かと考えさせる資料である。

菅公船繋（つなぎ）の松

御影本町六丁目三
阪神御影駅

国道四十三号線ぞいの綱敷天神のお旅所の中に、一本の老松があってこうよばれていた。昌泰四年（九〇一）、太宰府へ左遷される途中の菅原道真が、船路の途中このあたりに上陸し、船をつないだ浜辺の松だと伝説した。そのため綱敷天神のお旅所がおかれて、祭事にここまで神幸が行なわれてきた。